

人口減少対策調査特別委員会会議記録

人口減少対策調査特別委員会委員長 白澤 勉

- 1 日時
令和3年8月4日（水）
午前10時00分開会、午前11時37分散会
- 2 場所
第1委員会室
- 3 出席委員
白澤勉委員長、菅野ひろのり副委員長、五日市王委員、小西和子委員、名須川晋委員、岩崎友一委員、佐々木茂光委員、米内紘正委員、中平均委員、吉田敬子委員、ハクセル美穂子委員、上原康樹委員
- 4 欠席委員
なし
- 5 事務局職員
八重樫担当書記、畠山担当書記
- 6 説明のため出席した者
認定NPO法人 いわて子育てネット 副理事長 両川 いずみ 氏
- 7 一般傍聴者
1名
- 8 会議に付した事件
 - (1) 調査
これからの地域における子育て支援のあり方について
 - (2) その他
次回の委員会運営について
- 9 議事の内容

○**白澤勉委員長** ただいまから人口減少対策調査特別委員会を開会いたします。
これより本日の会議を開きます。
本日は、お手元に配付しております日程のとおり、これからの地域における子育て支援のあり方について調査を行いたいと思います。
本日は、講師として認定NPO法人いわて子育てネット、副理事長の両川いずみ様をお招きしておりますので、御紹介いたします。

○**両川いずみ参考人** 拙い話ですけれども、日々の活動の気づいている点などをお話しさせていただきますので、よろしく願いいたします。

○**白澤勉委員長** 両川様の御略歴につきましては、お手元に配付している資料のとおりで

ございます。

本日は、これからの地域における子育て支援のあり方についてと題しましてお話しいただくことになっております。

両川様におかれましては、御多忙のところ、このたびの御講演をお引き受けいただき、改めて感謝申し上げます。

これから講師のお話をいただくことといたしますが、後ほど両川様を交えての質疑、意見交換の時間を設けておりますので、御了承願いたいと思います。

それでは、両川様、よろしく願いいたします。

○両川いづみ参考人 よろしく願いいたします。これからの地域における子育て支援のあり方についてという表題をいただきましたので、それに沿いながらお話しさせていただきます。

初めに、私たちいわて子育てネットの20年の歩みということで、初めの頃と様相が大分変わってきました。初めの一歩というのは、ママの子育ての悩みや不安を払拭しようということで、本当に小さい単位での活動でした。その頃は自宅や公民館で集まったりというサークルのようなものだったのですけれども、日々気軽に集まれる場所が欲しいということで、子育て支援施設ができたわけです。

みんなが欲しがったので、それぞれの地域にできていますけれども、今はもう絶対になくってはならない施設になっています。居場所や交流する場だけではなくて、簡単な子育ての相談やセミナーの開催、子育て情報の提供などを、今は新型コロナウイルス感染症の影響により少し人数は減っていますが、毎日やっています。前はとにかく集まる場所ということで量を求められましたけれども、今は支援の質ということをすごく言われています。質に関しても、これからちょっと話をしていきたいと思っています。

それから、集まって楽しければいいというわけではなくて、子供の育ちの支援や親の育ちの支援に変わってきております。また、働く女性がすごく多くなってきており、社会も変化しています。20年前と随分変わっています。男女共同参画社会の推進やライフワークバランスの促進と、現実はまだまだ足りないと思っています。20年前からすれば随分皆様方の御努力で変わってきていると思います。対象も、先ほど言いましたように子育ての悩みや不安を持った母と子から、だんだん家族、お父さん、祖父母などになっています。

それから、地域社会も対象ですけれども、私たちが活動して思っているのが、まだ子育てをしていない学生のなかには、子育てをしている場面をあまり見たことがない人もいます。それから、子育ての疑似体験もない、子育てのことを語って聞かせる人もいないという方々もいて、自分の子供を産んだときに初めて未知との遭遇という形もあるので、やっぱり若いときに、結婚する前にある程度の予備知識が必要ではないかということで、子育てインキュベートと勝手に名前をつけたのですがすけれども、学生など若者にそういった知識、それから疑似体験をしていただくということが大事ではないかと感じております。結婚を希望する人たちへの結婚支援も大事ですが、若者のライフプラン形成を支援する事業も、

これから大事なことだと思って活動しているところです。

本日のテーマは、子育て支援施設の役割、子育て世帯の孤立、生活困窮からくる課題、行政が行うべき支援への提案、それから若い世代の段階からライフデザインの構築の必要性ということで三つほど大きなテーマをいただいておりますので、それに沿ってお話をさせていただきます。ただ、内容が分散していることもありますので、後で質問等で埋めればと思っております。

初めに、社会の変化に伴い多様化する子育て支援と地域子育て支援拠点施設の役割ということなのですが、子育て支援でもダイバーシティといった多様性ということがすごく言われていて、私たちが日頃運営させていただいているところでもどんな方にも来ていただいて、来たからにはいろいろ対応させていただいているのですけれども、実は去年、ハクセル美穂子議員にもお手伝いいただいて、県内に点在する日本語の不自由な外国人妻に対してzoomを用いてリモート広場を開催しました。子育てに関することや、英語を中心に育てるか、日本語で育てるかというのはやっぱり外国人の方たちの悩みだなと思いました。今まで、母国語で話せるという場がなかったので、とても満足がいただける事業でした。

ところが、事業が終了して臨時雇用の英語を話せるスタッフがなくなると、途端に機能が消滅してしまったということの一つ例として挙げさせていただいたのですが、多様化というのは、日本語が不自由な外国人や、障がいを持つお子様、ひとり親、アレルギー、あとは今だとLGBTQ、貧困家庭など、来た方には同じように対応しますが、何か壁を感じて来られない人たちもいるのではないかと感じています。そういった多様性に対しては、来てくれたら対応しますではなくて、受け入れる考え方が必要で、英語が話せるスタッフ、看護師免許があるスタッフ、助成金など行政の制度に詳しい人、法律家、それから男女共同参画サポーターなど、運営する方としては、そういう人材を常時雇用するのは大変なのですけれども、隔週に1回とか月に1回とか周期的に施設に派遣してもらえれば対応できるのではないかと思います。何日は英語の話せるスタッフがいますというチラシを出せば、まずいらっしゃる第一歩をそこできっかけをつくって、あとは多少言葉が通じなくてもうまく対応できるのではないかと考えているので、提案とすると、そういう方々を行政などから派遣していただければ、また役に立つ施設になると思っております。

またハブ機能の強化ということで、私たちは栄養士会や助産師と連携はしていますが、地域とのつながりをつくるため、アウトリーチという家庭訪問をしているNPO団体もあります。そこと上手につながって機能が広がればいいなと思っています。私たちが直接動かなくてもハブ機能を持つということは、当然連携ということで必要だと思われるし、実際やっているところもあるのですけれども、もうちょっと広げて考えてみると、もっとも必要なのがあると今回感じております。

それから、祖父母世代との交流、3世代交流というのはたまにやるのですけれども、も

うちちょっとおじいちゃん、おばあちゃんの力を子育てにも生かしていけるような仕組み、これはハブ機能に関しては私たちの反省も込めてなのですから、そういう取り組みを広げていかなければいけないと思っております。

あと産前産後の支援団体というところとも連携によるハブ機能が必要と思っております。

それから、ウェブ環境整備と人材育成と書きましたけれども、情報の受発信ということで、住んでいるところが離れていて、来たくても施設に来られない人たちをどうするかというのは、もともと抱えていた課題でした。よって、コロナ禍で人が集まれないというときだからこそ、zoom等を使ってリモート運営を実施したわけです。先ほど言いました英語を話せるママたちのオンラインおしゃべり広場や若者ライフプラン形成事業に対してもやはりコロナ禍で集まれないということでzoomを使ってやりました。また、運動、遊びのセミナーなども、東京都の講師に依頼し、オンラインで開催しました。それぞれの施設の特徴があると思っておりますけれども、ウェブ環境の整備というのもこれから大事なことだと思っております。

それからもう一つ、ぜひ皆さんにも考えていただきたいのですけれども、先ほど支援の質、遊びの質と言いましたが、非認知能力の育成というのがここ何年間か言われています。主体的に行動できる、興味、好奇心を強く持つ、挑戦する心、生き抜く心、力、根気強さなど、IQとは違う生きるための力がとても欠けている。それでこの非認知能力という言葉が出てきたときに、これからの社会というのは今までにないような課題が出てくる。そのときにみんなで力を合わせて考えて、対応していかなければいけないという話を二、三年前から聞いていました。今回、新型コロナウイルス感染症が拡大し、今まであまり経験したことのないことをどうやって解決していくかといったときに、やっぱり非認知能力というのが大事だと思いました。

非認知能力を育成するには、生活の中にいろんなヒントがあるのです。外遊びや自然遊びというのは、我々が子供の頃は外で泥んこで遊んで、親の目をくぐって危ないこともしたりして、そこで危機管理やいろんなことを体験したのですけれども、今外で遊ぶ人って見たことがないですね。自然豊かな岩手県と言うのですけれども、実際それを謳歌しているかという、なかなか難しい状況があると思います。実際、外遊びが得意ではない子供がふえている。遊び方も知らない。それから体力が低下しているということも、外遊びなどが自由にできていない状況だからではないかと思えます。

外遊びというのは、風を感じたり、葉っぱの色が変わったり、虫が出てきたり、いろんな感性を育てることだと思えますし、多少危険なことでもたくましく育てるいい場所で、そこで自分の危機管理能力を高める。室内の施設は、角もすっかり囲んで危なくないようになっていますけれども、本当にそれでいいのかと時々思うときもあります。やっぱり危機管理能力というのは、失敗したり多少痛い思いをしたりして、ここは危ないと自分で考えないと、感じないといけないうことだと思っております。外で遊ぶ機会はやっぱりいっぱい

つくらないといけない。親も自然の知恵や知識、遊び方をふやしてほしい。もうだんだん外遊びを知らない親御さんもふえておまして、自然がいっぱいあるのに自然の中で子供たちが遊ぶ姿が見えないということは、将来的に、すごく怖いことではないかと思っています。

一つ提案なのですが、前は遊べる公園と思っていましたけれども、支援施設として外で遊べるプレーパーク、穴を掘ってもいいし、木に登ってもいいし、草を取ってもいいし、中では火を燃やすということもできる。東京都辺りだとプレーパークというのが随分出てきていますけれども、昔と違うのは、餓鬼大将は大人でないといけない。餓鬼大将が育っていないので、大人が餓鬼大将として見守っていないと今の時代は怖いと思っています。やっぱり自由に遊べる場所が必要で、あえてつくらないといけない。子供にたくましくいろんな経験をさせるためにはやっぱりプレーパーク、外遊び専用の施設、もちろん市街地ばかりでなくて、ちょっと郊外に行けばそういった施設もあるのですけれども、ただそこも意識してつくっていかないとなかなかないと思います。昔の岩手公園だと、鈴なりでみんなそりで遊んだりしていたのですけれども、今は全く誰もいないですね。それはやっぱり怖いことだと思っています。ぜひぜひプレーパークのような知識を得ながら子供たちを遊ばせる場所というのが必要ではないかと思っております。

それから、2の行政が行うべき支援への提案です。おこがましいのですけれども、コロナ禍にあって経済的に逼迫している児童に経済援助となっていて、これはいわて子育てネットの理事会でも話したのですけれども、難しいことだと思えます。ただ、経済支援を二、三年と期限を決めて徹底的にやるというのも必要かもしれない。その財源は予算全体を見て優先順位の見直しをしていただきたい。そのためのお金のストックがあればいいのですけれども、今こういう緊急のときには、優先順位を見直す必要があるのではないかと思っております。

前から私も提案しているのですけれども、経済的に逼迫している児童だけではなく、子育て支援施策としてボランティア制度の導入、要するにチケットですね。3回か4回くらいのチケットで一時預かりや、どうしても体がだるい、疲れたから子供を見てもらっている間にちょっと一休みしたいというときにリラックスルームを使うとか、あとは、もうとても疲れて家の中が汚いからちょっと片づけてほしい、買い物に行ってきたほしいという家事支援などに使えるチケットです。実際、世田谷区でも、平成17年か18年あたりにやっていました。なかなか難しいところもあるかと思えますけれども、こういったボランティア制度というのも一つ考えてもらえればと思います。

また、どこかの政党でも言い始めているところがあるのですけれども、森林税があるのと同じように、子ども子育て支援税というのは検討できないか。国の制度なので、県でそれができるかどうかはわからないのですけれども、特別にそういった支援税のようなものを活用していくのも一つではないかと思っております。

それから、要検討と書いておきましたけれども、経済的に苦しい20～24歳に出産した方

への支援は私も熟慮していないのです。果たしてどうかなというところがあるのですけれども、ちょっと気になるところです。今、大学を出て社会人になって、ある程度仕事も覚えて、そうすると結婚の平均年齢が男性だと 31.1 歳、女性だと 29.4 歳で、晩婚というよりもっと遅いかもかもしれないのですけれども、だいぶ遅くなっています。生殖適齢期というのが 20 歳から 24 歳が 100%、その頃は一番子供ができやすい。その頃に実際自分が親だとすると、結婚なんてまだ早い、もう少し社会のことを覚えてからがいいのではないかと思う人もいるかもしれない。ただ岩手県ではまだまだ高卒の方も多くて、結婚も早いと思うのです。その人たちが 20 歳から 24 歳くらいの出産だと、本当に経済的にも苦しい。そういう場合でも手厚く子育て支援システムが使える、経済的支援があるというところだと子供が産みやすくなると思います。それから、産んだ後、鬱になったり、育てられなくて虐待したりという例もないわけではないので、そのところは手厚い支援システムが必要ではないかと思っております。ここところは早く結婚する人も多いので、考えていただければと思います。ちょっと手を差し伸べれば、いろんな課題が解決できる場所ではないかと思っております。

それから、私たちが今対応しているところとはちょっと違うのですけれども、ヤングケアラーもふえて問題になっています。それはなかなか声に出せないのですけれども、掘り出しと支援が必要ではないか、そこは私たちの分野外になるのであまり詳しくはないのですけれども、ただ気になっていて、ヤングケアラーの支援も必要なのではないかと思っております。

いよいよライフデザイン構築の必要性についてですが、私たちが支援していて、初めて子育てする親を見たときに、もっと早い段階で知っておいてほしいことがあります。知っていればもっと子育てが楽になると感じることも結構あります。今、共働きは当たり前の時代になっています。その中で、男女共同参画社会の推進だったり、ライフワークバランスの促進だったり、当たり前の男性の家事、育児、これは 60 代、70 代の人々が考えているよりも当たり前に感じている若い人たちが多くなってきています。初めの頃は、お父さんが出てくるということはなかったのですけれども、去年、産婦人科によるパパの講座をやったときは、お手伝いすればいいのだろうみたいなものではなくて、本当に我が事のように、自分がお産をする、自分が家事をする、自分が子育てをするという自分のこととして取り組んでいる姿勢が見えてきました。数は多くないのですけれども、それが当たり前で、70 代の私から見ると、前と随分違ってきていると思います。当たり前が当たり前にできるような仕組みをつくっていかないと、今の世の中には適応していかないと。自分自身も古くないか時々考えることがあるのですけれども、本当に世の中が変わってきています。

それから社会の変動への対応性と書きましたけれども、終身雇用というのはもう崩壊かもしれない。転職は当たり前だし、ツインカムで夫婦で補っていかないと、なかなか危険なところもいっぱいある時代になっているということも踏まえて、昨年度若者ライフプラン形成事業というのを岩手県から委託を受けました。皆さんの手元にある報告書なのです

が、岩手県のホームページにも掲載されていますので、後でじっくり見ていただければと思います。

その内容を簡単に御説明しますが、目的は若者世代が仕事だけではなくて、結婚や子育てを含めたライフプランについて考える機会にする。それから、自身が望む結婚や出産、子育て、働き方等のライフスタイルを実現させる支援をする。それから、仕事と育児の両立への不安を解消し、岩手県で働くこと、岩手県で結婚すること、岩手県で子育てすることを具体的にイメージしてもらうための事業と位置づけて行いました。

内容は、ライフプランのセミナーで、実際学生たちにライフプランを立ててもらいました。そのセミナーの中では、ライフプランって何ということ、ファイナンシャルプランナーの金沢滋さんに来ていただいて、これからの社会の変化やお金に関するお話をしていただきました。子供たちには、そういうこともあるのだという本当に初めて聞くような話で、いろんな刺激になったようです。

それから、岩手県立大学の看護学部の木地谷祐子先生には、男子にも知ってほしい妊娠と出産、不妊や生殖適齢期のお話もありました。あっと思ったときにはなかなか妊娠しづらい年になっていたということもあります。初めから知っていて自分で時期を選ぶのはいいのですけれども、もっと早く聞いておけばよかったということがないように、若いうちにその話はしておくべきではないかと思いました。

それから、お茶の水女子大学名誉教授の高濱裕子先生には、子供が育つってどういうこと、子供が豊かに育つには他者との関わりが大切ということで、子供の発育と養育者を比較して話していただきました。それは細かく報告書のほうに書いてありますので、後で見ただけであればと思います。

それで、事例紹介として、これから就職を選ぶときの一つのヒントとしていいなと思ったのですが、東北電力に勤めている女性なのですけれども、妊娠中とか子供が大きくなるまでは頼れる人が多くいる地元で就職する。東北電力ですと、職場を選べたらしいです。子供が小さいうちは地元にしばらくいて、お父さん、お母さん、周りの人に手伝ってもらおう。誰も知らないところに行くよりはいいということをお話しなさっていました。選ぶときの一つの考え方として学生たちに聞かせたいという想いで行いました。感想は、本当に満足度が高かったです。聞いてからの変化も随分ありました。

そのほかインターンシップでママと赤ちゃんとの交流ということで、初めて赤ちゃんの足を触ったらふにゃふにゃしている、すごくかわいい、お母さんたちって優しいなどいろんな感想を漏らしていました。もう一つのインターンシップは沐浴の体験もしてもらいました。細かく助産師にもいろいろ話をさせていただいて、どこかにインプットされていれば実際に親になったときに参考になると思っています。

全体のアンケートで、受講後の変化について、意識に変化があったという回答が91%でした。将来の仕事については73%、結婚については64%、子供についても64%でした。ライフプランを立ててどんなことを感じましたかについては、今まで将来についてあまり

考えたことがなかったという意見がありました。そうですね、勉強だけしてきているはずですから。実はその2年前あたりに高校生にもセミナーをやろうと思ってある高校に行ったら、えっ、結婚なんて受験生に何を言うのかという感じだったのでだめだと思ったのですけれども、去年は大学生が対象だったので、もうちょっと現実的になったかなと思います。

また、ライフプランを立てることによって、自分の将来が何となく想像できたり、将来のお金の上手な使い方を考える必要性を感じたという話をしていました。この事業はあなたにとって役立ちましたかという設問に対しては、はいという回答が91%です。セミナー受講後の満足度も高かったし、受講後の意識に変化をもたらしているということで、やっぱりライフプランは必要なのだと思います。これはすごく大事なことのだけれども、誰もあえて教えてはくれない。それから、教える、教わる機会が全くない人のほうが多い。大学生と高校生が社会に出る前に、就職活動を始める前に必要なセミナーではないかと思っています。なかなか難しいものがあるのかもしれないですけれども、学生たちが受講できるシステム構築ということで、大学の授業の中に入れることができないかと思っていて、県立大学だけでもそういうのがあればいいなと思っています。たしか来年度か再来年度に大学の方針の中に専門性と生きる力というのが入ってくるということなので、これから結婚して家庭を持って子供を育てて、しかも仕事もしながらというところだと、やっぱり事前のセミナーなどの講座が欲しいのではないかと思いますし、手応えがともありましたので、ぜひこれはやっていただきたいと思っています。

大学生向けの若者ライフプラン形成事業実施後、社会人にも必要だろうということで、企業向け、社会人向けで何かパッケージをつくらうと思っています。結婚を控えたカップル、出産を控えた御夫婦を対象として、学生のときは私から見たライフプランなのですけれども、夫婦となると私たちがつくっていかねばいけないライフプランになりますので、そういう視点というのはすごく大事ではないかと思っています。私から私たちへのライフプランとより現実的になりますので、今年度考えてみたいと思っています。

夫婦、家族が幸福な生活を送るために私たちの未来図を確認し、仕事と家庭の両立への不安を解消し、よりよい家庭環境をつくる。私たちもよい子育てはよい家庭環境という話をよくしていたのですけれども、そのよい家庭環境ってどうなのか。それで、夫婦のコミュニケーション力というのが落ちていないか。楽しい会話はできるけれども、実際の対話がしにくいのではないか。そういう対話力を向上させるというのを目的に考えてみたいと思っています。その背景には、離婚の増加、ひとり親の増加があります。厚生労働省の統計を見ると、3組に1組の割合で離婚するそうです。

それで、いつ離婚する率が高いかということ、結婚2年目から5年未満の間の離婚率が高いです。子供が0歳から2歳の頃、夫と妻の関係から父と母という親としての役割へと2人の関係が激変するのです。女性はいや応なくもう母になっていかざるを得ないのです。ところが、御主人のほうは、いつまでも追いつけないでいる。それでいらいらするお母さ

んといつも怒られているお父さんがふえてくる。産前産後は夫婦間の意思疎通がうまくできなくなって、お互いの考えや行動にずれが生じる。奥さんのほうは言いたいけれども上手に伝えられない。旦那さんが言ってくれれば手伝うのにとすると、その言葉に対して奥さんはカチンとくる。旦那さんは何を言っても怒られてしまうとを感じる。ただ、それが生じてくると産後鬱やDV、虐待等につながって行って、離婚につながる危機に発展する可能性が大きいのではないかと思います。

ひとり親になって立派にやっている方も多と思いますけれども、大方はやっぱり貧困状態になり子供の貧困もふえていくとなったときに、このところを何とかカバーできないかと考えたのが、ただ単に学生に行ったライフプラン形成事業を企業向けにつくるのではなく、夫婦になって、夫婦の関係を上手に持っていく対話の仕方などができるセミナーのほうがいいのではないかと。学生はけんかは直接しないでスマートフォンでするため、対話が下手だと思うのです。そのところをもう少し砕いていかないといけないというのがこれから考えていきたいと思っているところです。自分もやりながら、ちょっとやりにくいと思うところもいっぱいあるのですけれども、そういった取り組みも必要ではないかと思っています。

私たちの運営している施設では、面会交流も結構ふえてきています。要するに御夫婦が離婚して、ばらばらに生活している親子が、うちの施設に、お母さんが子供を連れてきて、お父さんは別行動で来て、それで子供とお父さんがその場で遊ぶ。それから、逆にお父さんが子供を連れてきて、お母さんは別行動で来て、子供とお母さんが会う。その後の別れるときの様子を見てみると、何で離婚したのだらうと思ったりします。私も何回か離婚してやると思ったこともありますけれども、やっぱりそういう時期ってあるし、でもそこを上手に乗り越えていくというのも必要だと思うので、そういうセミナーを今後、少しやってみようかと思っています。

家事のやり方やおむつの取り替え方、ミルクのあげ方という講座はあるのだけれども、要するに家庭生活がうまく運営できるように、御夫婦がうまく対話ができる、お互いに協力して自分たちが思う方向にちゃんと行けるように導くというか、自分たちで選択しながらやらせてもらって、できればお父さん、お母さんがにこにこ、そういう環境で子供を育ててほしいなと思っています。そういう自分も随分夫婦げんかもしてきましたけれども、夫婦げんかが子供に与える影響は虐待と同じことなので、このところはちょっとやってみたいと思っています。

岩手県立大学で、夫婦学を研究していきたいという方がいらして、その先生と相談しながら、これからつくっていこうと思っているところです。

予定していた時間より少し早いですけれども、大体こんな感じのことを考えて活動しているところです。ありがとうございました。

○白澤勉委員長 大変貴重なお話をいただきまして、ありがとうございました。

これより質疑、意見交換を行いたいと思います。ただいまお話しいただきましたことに

関しまして、質疑、御意見等がありましたらそれぞれお願いいたします。

○米内紘正委員 今日は大変貴重なお話をありがとうございました。米内と申します。今回県議会の調査ということで、県の子育て支援のあり方を考えていかなければいけないと思うのですが、私自身、子育てを始めてちょうど6カ月だったものですから、完全にセミナーの一受講生としての立場からの質問になってしまったら大変恐縮だと思っております。

まさに先ほどありましたライフプラン形成事業を通じてというところで、誰も教えてくれない、教わる機会がないというところを、今日お聞きできて本当に勉強になったと思うのですが、共働き世帯がふえてきて、これをどこで、どの時間帯に教わるかということ考えたことがなかったのです。基本的な子育てについては、調べたり聞いたりするのですが、先ほどの非認知能力の形成などは、もしきょうお聞きしなかったら、ずっとお聞きすることがなかったと思います。その機会のあり方ということで最後お話しいただきましたけれども、大学生のときに聞いていたら、結婚っていいな、子育てっていいなといういい影響があると思いますし、先ほどの企業向けのように、第一子が産まれて半年以内に必修という形で夫婦そろって聞く機会というのが本当に必要と思います。運転免許の更新ではないですが、絶対にこのお話を聞くというような機会があると、考えるきっかけになって、その後の生活にすごくいい影響が出てくると思うのですが、共働き世帯がふえているという中で、どういうふうにより多くの人にライフプラン形成事業というものを伝えていくのか、その辺のお考えをお聞かせいただければと思います。

○両川いずみ参考人 岩手県の中にも子育てに優しい企業がありますので、そういうところに営業をかけて、これから結婚を考えている方、または結婚して今度第一子が産まれる方々にお話しするという形で考えております。

○米内紘正委員 企業に行けたらいいのですが、そういう企業にお勤めではない方は、夜や朝になってしまうと思うのですが、どういう時間帯を想定されているのでしょうか。

○両川いずみ参考人 考えているのは土曜日です。あと来られる人ばかりではないので、登録いただければ、申込みをされた方に期限つきでYouTubeでの配信も考えています。それを聞くのは若いカップルだけではなくて、おじいちゃん、おばあちゃんにも聞いてもらいたいので、そここのところも含めて運動してみようかと考えております。実際できるかどうかはわからないのですが、いずれそのプログラミングをちょっとつくってみようと思っています。今年からやるとすれば9月以降になると思いますので、5回くらいしかセミナーは開けません、1回目と5回目は夫婦間のところをやって、あとはおじいちゃん、おばあちゃんを含めた、それこそ沐浴を中心にした周りの話をして、あともう二つくらい何か絡めて若いカップルの人たちにお話ししたいと思っています。

○米内紘正委員 その中で、ちょっと先の話になるかもしれないのですが、県内を考えていくと、そういうのを伝えていく人材がどんどん必要になっていくと思うのです。

そういう伝える側の人材育成、また、どういう人がそういうところに入っていきのいいのか、もし今されていることがあったら教えてください。

○**両川いずみ参考人** もし今年9月以降にやるような具体的な形が出たとすれば、講師の方々は、前に行った先生方を中心にやっっていこうと考えています。人材育成までは今年はとても無理だと思います。やってみないとどうなるかわからないので、テキストみたいなものを作ったとしても、初めから完成度の高いものというよりは、それを改善しながら、成長させながら、まずやってみようかなというのがNPOの気楽なところですが、でも、ただではできないので、助成金に今チャレンジしていますけれども、取れればやるし、取れなければ来年度何か探してまたやろうかなと思っています。

○**吉田敬子委員** ありがとうございます。ちょっと何点か、感想も含めてになりますけれどもお伺いしたいと思います。非認知能力の育成というところで、外遊びや自然体験がふえていくような内容になればいいなと思うのですが、例えば全国的には幼児教育センターというのができて、これは保育所とかに限る話になってしまうのですが、岩手県もセンターができて、例えばそういう非認知能力が大事だということで保育士を育成したりする機会がふえてくると思うのです。両川さんから先ほどお話があったとおり、親世代が遊び方がわからなくて、子供を連れていけないという方がやっぱり多いと思うのです。私も子供が3歳になって、外に遊びに行くと、本当は遊ばせたいけれども、どこでどう遊んでいいかわからない、どこが遊びやすいかという情報もよくわからないというお母さん、御家族は多いなというのを感じます。子供たちもそうですけれども、今後、そういう親世代へどういったアプローチを考えていらっしゃるのかということをお話していただきたいと思っています。

例えば両川さんの森のようちえんの事業とかもすごく積極的にされていると思うのですが、私もその森のようちえんという事業をもっと岩手県で他県に負けないくらい普及させていきたいと思いつつも、その人材もなかなかいません。岩手県にはいわての森林づくり県民税がありますが、他県だと森林税を財源にして森のようちえんのような自然遊び体験を伝えることができる人材を育成しているのです、そういう提言もさせていただいているのですが、なかなかそこまで踏み込んだことができていません。きょうは子育て支援の保健福祉関係の担当がいらっしゃいますけれども、やっぱりほかの部局を横断していろいろ連携できたらいいなと思っています。

あと先ほどバウチャー制度についてのお話がありまして、そこは私も何回か提言させていただいていますが、特に私は産前産後のときの自分の経験上、そういう産前産後の利用機会はあると言われても、実際に結構ハードルが高いですし、まさか自分が当事者だとも思っていませんでした。最初からそういうチケットがあるとないのでは全然違うのではないかと思います。あとは利用内容が選べるというのもそのとおりで感じたので、そこはすごく参考になりました。

あと二つ目の質問ですが、ライフプランの形成を大学生にされているというのは、すご

くすばらしいと感じています。両川さんがおっしゃっていましたが、高校生の中でライフプランの教育というのをいかにやっていくべきかということを私も議会の中で取り上げたりするのですが、高校生に向けてやるための御指導や御所見があればお伺いしたいと思います。

○両川いずみ参考人 前に高校生にライフプランのセミナーを行った時は、進学校に行ってしまったのですが、むしろ就職が多い実業校を対象にしたほうが受け入れてもらえるかなというのをちょっと感じたところです。今、中学生や高校生に対し、生命の講義を助産師がしていると思うのですが、人生を歩くというのとはもうちょっと別な要素も必要だと思います。助産師の方々がやってくださっている取り組みはもちろん尊重しますが、そのほかの要素としてやっていくのはやっぱり必要だと思っています。ただそれが本当に必要かどうかということ为学校長が感じないと、なかなか通らないと思うのです。大学の場合でも、年間通しての授業が決まっているので、来年度や再来年度に向けた提案として持っていけないと計画を立てられないと思います。ただ大学自体がそれをオリエンテーションなりの中でやっていただければ、もうそれはそれで動いていくものだと思うので、動く前のはしりのところをNPOとしてお手伝いすることも可能と思っているところです。バウチャー制度も世田谷区で平成17年ころにやっていたけれども、いろいろ問題もあったみたいなのですが、助かる人たちはいたと思います。

○吉田敬子委員 親世代へはどういったアプローチを考えていらっしゃいますか。

○両川いずみ参考人 親世代へは、うちのフェイスブックや、うちの施設を利用してくださいの方にチラシを配布する程度のお知らせです。何十人も集まっても困るので、ひそかにやっています。ただ公園に連れていくと、公園の草木は取れないのです。見ることはできるけれども、ちょっとした雑草でも取れないという指導でやっているので、実際の外遊びというのもなかなか満足するところまではいかないのです。だから、盛岡市だったら市営球場の辺りとか、あとはあまり使われていない公園とか、何でも取っていいという場所が欲しいなと思っています。ただどっちにしても予算がつかないと、みんなの御厚意だけではなかなかできないことだと思います。ただちょっと期待しているのは、中央公園には保育園と不登校のお子さんたちのための施設ができるということで、あそこは草木もあるので、ああいうとこでできればいいなと思います。ただ、なかなか草木を取るとなると、盛岡市の公園みどり課等に行ってお話ししてということが必要になります。前に岩手公園でやるために許可をいただいたときも、ほかから草木を持ってきて、それで遊ばせるということをしていたのですが、あまり意味がないなと思いました。かといって勝手に取るというのも場所的にまずいだろうから、やっぱりそういうことができる場所があればいいなと思って今活動しています。親御さんで参加する人は転勤族が多いです。なかなか地元の人で参加する人は少ないです。転勤族だとそういうところを求めて来る方もいるし、実際そういうプレーパークで遊んでいた子供が来ると動きが全然違いますので、幾ら宣伝してもなかなかいらないこともあるのですが、少人数でも少しずつやって

います。それで、親御さんが変わります。ただ公園に子供を連れてきて、何となく歩いていたけれども、いろんな発見があり、見る視点が変わってきたということもおっしゃるので、小さな子供を対象というよりも、お母さん、お父さんを対象として、遊び方や季節の変化があるのを子供と楽しむというようなことを細かくやっています。

○吉田敬子委員 ありがとうございます。御提言されているとおり、やっぱり何でもできるプレーパークというのがあるといいなということですね。

○両川いずみ参考人 多分子どもの森などはできるのだと思うのですが、日頃すぐ行けるところでもないの、各市町村のどこか適当な公園を開放してもらって、でもそこに1人はつけなければいけないと思っています。

○吉田敬子委員 そうですね。子どもの森の老朽化している遊具を、今回はいわての森林づくり県民税を活用して整備するという、子ども子育てのほうだけではできないものをほかの予算でということもちょっとずつできるようにはなっています。ただやっぱり場所や距離感、規模とかということになると、できれば各市町村にあればいいということを変更してみました。

ちょっとライフプランに話は戻るのですが、進学校ではなく、実業高校のほうがというお話もあったのですが、私は逆に進学校でもやっていただきたいです。私は自分が高校生のはきは、大学に行って、仕事をするしか頭になくて、もう少し結婚や子育てなどのライフプランについて情報としてあったらよかったなと思います。キャリア教育は高校でたくさん受けて、どこの大学へ行って、どこに就職してというのを教えてもらった経験はあるのですが、実際生活の部分あまり聞けなかったと感じています。もちろん大学生にもやられているので、今は大学でも進んでいると思うのですが、実業校だけでなく、全部の高校でやれたらいいのだろうなと思います。

○両川いずみ参考人 それは、一NPOの力ではなかなかできないですね。実現できる部分をちょっとやって、それで提言していくような形はできるのだけれども、やっぱりそのところはそれこそ議員の力が必要とったりします。

○吉田敬子委員 それこそ学校長の判断というものもあるというお話を聞いて、そのとおりだなと思いましたし、現場ではすごく御苦労されているのだなと思いました。

○両川いずみ参考人 あと提案していく時期ですよ。私たちは助成金が確実に取れたら動きますので、そうすると早くても5月、6月ですから、もう学校の行事は決まっていなかなかり込めないの、できれば来年度に向けてという形であれば、今年度のうちにこういうことをやるのはいかがですかと提案することはできるかもしれない。ただ岩手県として、こういうところに力をつけていきましょう、学校の教育機関にもこういう要素をちゃんと組み立てていきましょうと提案して決めていただければ、その中の一部でお手伝いができると思います。

実際、夫婦間の夫婦会議というのを福岡県のある株式会社がやっていました。その会社は、養成をするのに、何十万円という講座をやって、もちろんそれは企業としてやってい

るのだと思うのですけれども、徹底してやるにはやっぱりある程度の計画性と予算づけと関係機関間の連携がないと、なかなか浸透していかないと思います。私たちの活動としてやってみて、やっぱりこれは必要だという提言のところまではできますので、あとは先生方のお力とか担当課のお力が必要です。やっぱり行政の力というのは一斉にぱっといきまずので、私たちはそれに行く前の準備というか、エビデンスをつくるための活動だと思っているので、ぜひ活用していただいて、全体の動きにしていいただければと思います。

○ハクセル美穂子委員 講演の中で御紹介もいただいて、ありがとうございました。私も英語をお話するお母さん方のz o o m会議のゲスト講師としてお呼びいただいて、釜石市とか結構岩手県内各地に外国籍のお母様がいらっしゃって、英語で話す機会がないとか、どっちの言語で育てていくべきかというような悩みを実際話せたのがすごく私も勉強になりました。これはやっぱりコロナのプラスの面というか、z o o mを使ったからこそ、いろんなところに点在している多様性のあるお母さんたちが一気に集まることができました。そういう場をつくっていただいたことに本当に私も感謝を申し上げる次第です。その話も踏まえて、岩手県は120万人ぐらいしかいないので、多様性のある方といっても各地に数人ずつというところで、その方々を集めて提供するという手法を、z o o mでセミナーもそうですけれども、だんだん変えていかななくてはいけないというのをすごく感じた機会でした。ぜひライフプランについても積極的にそういったものも活用してやっていただけたらいいなと思っております。

もう一つは、私の息子も中学校に入って、先日ライフプランを作成したのです。自分のライフプランの中に、この時期は妻と子育てをすると書いていてうれしかったというものもあったのですが、やっぱり共働きの親の背中を見ているので、次の世代はきっと妻と子育てをするという意識を持つ世代になってくると思います。両川さんがおっしゃっていた岩手県立大学との若者ライフプラン形成事業はすごく重要だと思いました。これは、岩手県立大学としっかり形をつくっていただいて、ちゃんと委託料をもらっていろいろな市町村に横展開できるような形までいけるよう、ぜひ啓発だけではなく、収入源にもなるような事業になるように、県議会でも何か支援策を考えていかななくてはいけないと思っていました。

また、子ども子育て支援税の創設の件についてお話しをされていて、私もそう思って政策に出したりしているのですが、具体的に進んでいません。子ども子育て支援税をつくったとして、その支出先はどういうところとか、こういうのに使えたらいいなというNPOとして活動している中での思いがあれば、その辺のところをもうちょっと詳しく教えていただけたらと思います。

○両川いずみ参考人 具体的にはないです。ただ、NPOの運営自体も結構厳しいので、そういうところを心配しないで運営できるようになればいいなということと、それにはやっぱり果たして効果のある活動をしている団体なのかどうか、お金を出すほうとすれば、そこをちゃんと調査しないといけないと思います。あと岩手県にしても盛岡市にしても一

応基金という形で助成金を出して下さったりしていますが、なかなか財政がどんなところでも大変だと思うし、子供の福祉のほうにも、保育園やいろんなところに随分大きなお金が出ていると思うのです。それから、いろいろ調べてみると、ひとり親を対象とした助成金にしても随分あるのだけれども、実際、必要な活動をやりたいと言ったとき、なかなか助成金がすぐ手に入るわけではないので、その辺が不便だと思っています。いわての森林づくり県民税だって1,000円払っているのですよね。実際に前にいたNPOでもそれを使って活動しましたし、子供の自然遊びのために使わせていただいたりしました。ただ子どもも税になったときには国の制度になるでしょうから。

○ハクセル美穂子委員 国でも県でも。いわての森林づくり県民税は県です。

○両川いずみ参考人 いわての森林づくり県民税はね。でも、その話をいわて子育てネットの理事会でいろいろ話したのですけれども、結構国との関係とかいろいろ難しいと言われて、皆さん御苦労なさっているというのは何となく思っていました。やっぱりひとり親のところとか、あとまだ目に見えていない課題で必要なところから使って、それが常時必要なものであれば、制度の中に入れていけるようになればいいと思います。やってみなければわからないことがいっぱいあって、行政だとなかなか勝手に動けないと思いますが、私たちは一NPOで柔軟に動けるので、やってみただけけれども、やっぱりこうでしたよということで提案できるNPOでいたいなと思っています。

○ハクセル美穂子委員 ありがとうございます。すごくそうだなと思う意見を今いただいたのですが、いわての森林づくり県民税は県の特別の税金で、それを1,000円ずつもらっているのと同じような形で、例えば500円でもいいからどうかというのはずっと提言させていただいています。その使い方に関しては私の政策は医療費だったのですが、こういうライフプラン形成事業などにも使えるとなると、かなり幅が広がりますし、今、課題としている人口減少や少子化の関係にも大きく寄与するものになると思います。助産師の教えてくださる赤ちゃんの扱い方というのも必要なのですけれども、子供が産まれたときに男女間での考え方の差とか夫婦間の仲をカウンセリングするような欧米などではあるものが日本にはまずありません。一旦壊れてしまった絆をつなぐ機会ということも教えてくれるところがほぼないまま、我々は紆余曲折して何とか育てていますけれども、確かに離婚される方もすごく多くて、面会交流もされているというのはありがたいことだと思いました。やっぱり子供にとっては、離婚しても両親とのつながりをどう形成していくかで、その後の人生が全く違っていくと思うので、こういった事業を何とか行政とともにできるプランを私も一緒に考えながらやっていければと思っています。ぜひ提言できるNPOとしての幅をさらに広げていただきつつ、また我々にも教えていただければと思っています。今日はありがとうございました。

○両川いずみ参考人 別れるかどうかという話になって、財産をどうするか、養育費をどうするかというところまでいってしまう前の要するに夫婦間のカウンセリングのところが必要ではないかと思えますし、あと男女共同参画センターもありますし、男性と女性が両

方うまくいくような形で窓口があればいいのだろうなと思っています。

○菅野ひろのり委員 今日ありがとうございます。今日のテーマの地域子育て支援拠点施設ということでプレーパークを御紹介いただきました。私は奥州市出身ですが、確かに整備を求める動きもあるなと思う一方で、人口が密集している盛岡市のような都市部と農村あるいは漁村が求めるこういった施設というのが、もしかして異なるのかなという印象で聞いておりました。そういった中で、県内、全国を見渡したときに、地域差の特徴があるのかどうか、求められる支援施設の傾向があるか教えていただきたいと思います。

○両川いずみ参考人 統計を取ったことがないのでわからないですけども、農村部と都市部とでは、子育てに関してやっていることは違うかもしれないけれども、困っていることは同じではないかと思います。農村部のほうで外遊びをしているかということ、農村部でも子供たちが遊んでいるのを見たことがない。それから、子供が育つということを考えれば、地域というか、親任せではなかなかできない状況になっているので、やっぱり親に代わったそういった施設も必要なのではないかと思います。保育園とか幼稚園に入っていれば、そういったことが大分補完できると思うのですけれども、私たちが今対象にしているのは0歳から3歳なのです。ほかから見ればあつという間の期間なのですけれども、親にとっては3倍、4倍の時間の長さですよ。毎日変化があるけれども、とても手がかかる。でも文部科学省で小学校の今の子供たちの状況を見たときに、今までだったら必ずそこまで成長していたものが随分欠けてきているのはなぜかということで、やっと乳幼児期の育て方、育ち方、その環境を見てくれるようになりました。非認知能力は何歳でもついてくるのですけれども、乳幼児期の環境がとても大事だということを見直されています。小学校や中学校のように、子供たちと何か自発的にやると、それなりに楽しいところもあるのですけれども、私たちが対象にしているのはゼロ、1、2歳の小さい子で、張り合いがないと言えば張り合いがないところですが、むしろ子供とお母さんまたはお父さん、おじいちゃん、おばあちゃんという家族の関係でも支援になっていきますし、そこはスタート時点で、とても大事なところだと思っています。時期的にはすぐに過ぎますけれども、その3年間というのはこれからの子供にとっても、お母さんの子供に対する対応に対しても随分変化が見られるところではないかと思ってやっています。決して小さいから見過ごしてしまうようなことがないようにぜひお願いしたいと思っています。

○上原康樹委員 時間もありませんので、短く二つお伺いします。一つはママ友、もう一つは父親不在です。最初のママ友に関しては、プレーパークの話の際、ぱっとママ友という言葉が浮かびました。子供を育てるお母さんたちが集まって、それぞれ互いに頼り合うように、教え合うようにして一つの社会を形成するのですけれども、やっぱりそこにキャラクターが突出していくリーダーのような方が生まれて、それにつき従うお母さんたちが形成されて一つの大きな集団になって、結果本当にあった怖い話のようなエピソードをたくさん耳にした記憶があります。そういうプレーパークをさばっていく大人の餓鬼大将というのは本当に必要だと思います。ただ単に遊びを提供するというだけではなくて、

そのプレーパークの人間模様、群像をよく見極めて、過不足なくみんなが平等に楽しめる、そして大切な子供を育てていくことができるという環境を育てるためのよい意味での餓鬼大将、男の方でもいいのですけれども、待ったという采配ができるような力のある人間力というのが必要だと思うのですけれども、まずその1点を伺います。

○両川いずみ参考人 そのとおりだと思います。随分前の言葉ですけれども、公園デビューして、公園に行くとボスがいて、何となくそれに従っていく。ドラマにもなったくらい力関係というのがあるのですけれども、それは人間のコミュニケーション力や自分のアイデンティティーが希薄な人間像というのがちょっと出てきていると思います。この間びっくりしたのですけれども、今の時代のママ友は、コロナの前だったかもしれませんが、うちのm a * m a l l (マ・モール) という施設に4時くらいにいらして、ママ友の出会いアプリで、名前も知らないし、趣味が合うのかどうかもわからないけれども、m a * m a l l (マ・モール) で4時に会いましょうというようなことをやっている人もいます。それで何が出てくるかというのはちょっとわからないのですけれども、ママ友は子育てをしているお母さんにとってはとても大事です。でもママ友に影響され過ぎる人も中にはいるし、うちの施設でも、あまり今まではなかったのですけれども、ママ友の力関係で、あの人がいるなら行かないということが出てきてびっくりしたことがありました。ただうちの施設のスタッフには、スタッフの態度がかがみになって利用者にはそれうつつののだと言っています。だから、そういうことが起きるといことは、自分たちにも何か手落ちがあるのだと。同じ人でも、あっちの施設ではこうだけれども、うちに来ると結構きちっと使っているという人がいると思うのです。だから、運営するほうの姿勢も隙を与えないと言うと変なのですけれども、それはコツがいろいろあるのではないかと考えています。別に子育て施設だけではなく、どこの施設でも、ここはきっちりしていて、使う人も整然と使っているというのはやっぱり運営力ではないかと思っています。何となくごちゃごちゃしていても、うまく回っていれば、その個性なので、どうしなければいけないという決まりはないけれども、確かにそういう怖さがあります。お母さんたち同士で何かがあったときに、こっちでダメとかどうとかと言うと、もっと面倒くさくなるので、私たちは毅然としてどなたにも同じように接しましょうということでやっています。それは人のコミュニケーション力がやっぱり弱まっているところもあるかもしれないです。自分の意見を持っていない人たちとか、何となく強い人の陰に隠れてくっついていて人とか、それは何ともできないです。

○上原康樹委員 次に、父親不在ということで、奥さんと御主人の仲が悪いということではないけれども、本当に引き裂かれるような場面というのはあるわけです。特に転勤が多い会社は悲惨な状態だと思います。私も乳飲み子と幼児を小脇に抱えて広範囲に家族を引きずるようにして転勤を何度も重ねました。考えてみますと、もし父親が会社の辞令で盛岡市から九州に行ってくださいね、北海道の網走市に行ってくださいねと言われたときに断れないですよ。そのときに、家族と一緒にいくかというお父さんもいるでしょうし、

またお母さんたちが、いや、私たちはここにとどまりたいという場合もあると思います。結果的に子供の成長の過程の中で大事な時期に父親がいなくなるということについてどう思われますか。

○両川いずみ参考人 うちも孫たちは大きくなったのですけれども、今、孫のお父さんはシンガポール、お母さんは高校生の孫と川崎市で暮らしています。大学生の孫はおじいちゃん、おばあちゃんのところに行きたいというので盛岡市に来て、3カ所でそれぞれ暮らしています。でも、今の時代、しょっちゅう顔を見てお話ししているのです。ツールをいろいろ使って工夫しながら、お父さんが不在だと思わせないことができるのです。

○上原康樹委員 なるほど、今はそれができるのですね。

○両川いずみ参考人 そうなのです。でも、本当にサラリーマンの大変なところですよ。子供が小さいうちはついていけるけれども、大きくなるとなかなかできない。うちの事業で考えれば、お父さんに対しては今は何もないですけれども、転勤族に向けて、ようこそ盛岡へという事業をやっています。転勤してきたときは知っている人が誰もいないので、まず子育て施設を紹介し、あと盛岡市は大体こんなところだよと教えています。一回来ると、そこで友達ができて、施設のことをいろいろ知って利用したり、または預かりの事業のことも聞いて、誰も頼る人がいないからということで随分利用されたりしています。私たちのやれることというと、まず来たときにこういうところがあるよということで、ようこそ盛岡へという事業を続けていきたいと思えますけれども、お父さんに関してはちょっと大変ですね。

○上原康樹委員 最後にさせていただきますけれども、テレビ電話があったなんて、私の時代には子供に電話で説教をすることがいかにむなしいことかということをお父さん勉強させていただきましたけれども、最近は企業のほうでもそういうことを若干付度してくれるところも出ていて聞いております。これがより広く企業側に理解されるような社会になればいいと思いますが、いろいろところで提言もよろしく願いいたします。ありがとうございました。

○両川いずみ参考人 だから、夫婦間のコミュニケーションが大事なのです。まず初めの一歩のところで、こういうときはこうしようというのを2人で決めておくといいと思います。

○上原康樹委員 妻に謝ります。

○白澤勉委員長 ありがとうございました。

ほかにありませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○白澤勉委員長 ほかにないようでございますので、本日の調査はこれをもって終了いたします。

両川様、本日はお忙しいところ、御丁寧にお話しいただきまして、誠にありがとうございました。特にも若者への結婚、子育てなどのライフデザイン構築支援の取り組み、教育

機関との連携の提言であったり、あるいは子育て世代のニーズに応えるための子育て支援拠点のあり方、こういったさまざまな点につきまして御提案いただきましたことに感謝申し上げます。両川様に改めまして皆様から拍手をもって感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。(拍手)

委員の皆様には、次回の委員会運営等について御相談がありますので、しばしお残りいただきたいと思います。

○**両川いずみ参考人** どうもありがとうございました。大通りの中劇のあるビルの3階におりますので、どうぞお寄りください。

○**白澤勉委員長** 次に、9月に予定されております当委員会の調査事項についてですが、御意見等はございますか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○**白澤勉委員長** 特に御意見等がなければ、当職に御一任願いたいと思いますが、これに御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○**白澤勉委員長** 御異議なしと認め、さよう決定いたしました。

以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。

本日はこれをもって散会いたします。ありがとうございました。